

令和元年度協働事業報告会（平成 30 年度事業実施分）
総評（コメント）（協働事業選考委員会志村委員長）

この相互提案協働事業は平成 19 年度から始まり、試行錯誤して行ってきたが、今日は特に団体の皆様と行政側の皆様がすごく良い関係でやるようになったということがとても印象的だった。

今回の事業の特徴は、両方とも成果物が出てくるタイプの協働だったことである。このことは私たち委員もわかりやすいが、両事業とも行政が関わったとは思えない柔軟ささと本当に市民に近づいた、読みやすく、手に取りやすい、成果物ができており、やはり行政が作るものとは違うと感じた。同じ行政の予算を使うのであれば、こうやって市民に手に取ってもらいやすいものにするのが行政側としても本望だと考える。行政だけではできない、市民グループだけでもできない、一緒にやるからこそいいものができてくるという本当の協働の見本な形が今回、如実に表れており、心地よく見させてもらった。

そしてもうひとつ、両グループとも活動をされた成果をご自身たちでアンケートやネットで反応を分析して、きっちりとリアクションをとっていたことがおもしろいと感じた。普通は終わったら後は何もしないことが多いが、今回はきちんとそこで反省して、さらに前に進むためにはどうすればいいかを考えていた。発表を聞いていて、これは継続事業と見てしまうくらいだった。単年度で終わってしまう事業が多い中で、今日の団体のように自主的に動けるノウハウや能力を持った人たちが出てきているということが非常に頼もしいと感じた。

そして両事業とも想定以上の様々なことができており、学会に発表したらいいのではないかというくらいだった。様々な悩みや実情があり、市民目線でヒアリングを行うことで行政のアンケートでは抽出できない情報を抽出していた。そういう意味では本当に役割分担を上手にやられており、想像以上の成果や展開が広がって見えてきたなということがわかった。そういうことがわかった以上、報告会の参加者がこれしかないのは少し残念だ。この成果物もって「つながる鎌倉」は「ひろげる鎌倉」にしなければならない。要するに、こういうことが市民の皆様にもできるし、協働事業だからこそいいものができるということが広がっていくことが大切であり、広げるためには行政の方もこういう成果があがったことを広めていくべきだ。また、そういうことをやりたいという潜在的な能力や知力、体力をもった人が鎌倉にはいる。若い大学生とか先々に希望がある子供達が鎌倉市には多くいるはずなので、そういうところまで可能性を広げていけるように私達も支援していかなければならない。ぜひ皆様も若い人たちに繋げていくことを意識してほしい。また、条例も整っている中で今後、鎌倉市民の皆様がいかに活動を広げ動かしていくことにかかると考える。これからも審査等やっていく中で、皆様ができる役割というものに大いに期待をもったので、これからもしっかり支えていきたいと感じた。ぜひ皆様と一緒に鎌倉を良いまちにしていきましょう。